

[学会] 第1002回 千葉医学会例会
第17回 神経内科例会

日時：平成11年12月18日(土) 14:00~18:00
場所：ホテルサンガーデン千葉

1. 原発性副甲状腺機能低下症によるパーキンソニズム

鈴木浩二, 畠山治子, 宗像 伸
南雲清美, 小島重幸(松戸市立)

原発性副甲状腺機能低下症により安静時振戦, 歯車様筋強剛などのパーキンソン病類似の神経症状を呈した83歳女性例を報告した。頭部CTでは両側大脳基底核, 小脳歯状核などに石灰化をみとめた。副作用のため少量のlevodopaしか投与できなかったが, 症状の進行は緩徐であった。

2. 当院における塩酸セレギリンの臨床効果
(14例の検討)

谷 将之, 大隅悦子, 大飯啓史
今井尚志 (国療千葉東)

[目的] 塩酸セレギリンの臨床効果を検討した。[方法] 当院受診中のパーキンソン病患者14例(男性6例女性8例, 平均年齢71.8歳)に塩酸セレギリンを2.5mgから開始した。[結果] 歩行障害・固縮・振戦・無動・on-off現象に改善を認め, L-dopa減量可能であった症例も存在した。[結論] 早期からの塩酸セレギリンの服用でL-dopa製剤の増量を遅延させ, パーキンソン病の予後を改善すると考えられた。

3. 著明な腰曲がりを呈した白質脳症の1症例

高橋宏和, 米津彰一, 吉川由利子
朝比奈正人, 服部孝道 (千大)

著明な腰曲がり姿勢を呈し, 腰部傍脊柱筋の萎縮を示す白質脳症の1例を経験した。症例は52歳女性。痴呆, 両下肢痙縮, 著明な腰曲がりを認めた。腰部傍脊柱筋の筋萎縮, MRI上白質脳症, 多発性ラクナ, SPECTで脳血流低下を認めた。表面筋電図上, 腰をのばそうとした時に腹直筋の筋活動増加がみられた。下肢および体幹の筋緊張異常はともに左側優位にみられ, 痴呆もみられることから, 白質病変が腰曲がりに関与している可能性も考えられた。

4. 老人保健施設における痴呆患者診療

柏戸孝一, 高間淳子, 篠遠 仁
旭 俊臣 (旭神経内科)

一般に痴呆症は治療が困難と考えられており, その為に介護者が介護負担を強いられながらも, やむを得ないと考えてその負担を背負い込んでしまっているケースが少なからず存在すると思われます。今回, 我々が栗ヶ沢デイホームで痴呆患者の診療を行ってきたなかで, 患者の臨床上的問題点と介護者が介護負担を感じる問題点に対し積極的に介入することにより, 病状が「良くなった」いくつかの症例について報告したいと思います。

5. 5-HT_{1A} 作動薬が有効であった脊髄小脳変性症の1例

金井数明, 大木 剛, 朝比奈正人
新井公人 (千大)

小脳性運動失調のみが緩徐に進行する経過14年の遺伝性脊髄小脳変性症77才女性。膝踵試験等で粗大な不随意運動が出現し, 著明な起立・歩行障害を認めた。5-HT_{1A} 作動薬を用い, これらの小脳性運動失調症状の改善をみた。機序として小脳に関与するセロトニン系の賦活による効果が考えられた。小脳皮質萎縮症型の脊髄小脳変性症に対しては, 5-HT_{1A} 作動薬は有効な治療薬となる可能性があり, 今後症例を重ねる必要があると考えられた。

6. 白質病変を伴う亜急性に進行した若年性Fronto-temporal dementia (FTD) の1例

中川喜美子, 大木 剛, 新井公人
朝比奈正人, 服部孝道 (千大)

症例は39歳女性。物忘れで発症し, 3カ月後に頭部CTで両側側脳室前角周囲のLDAと両側前頭葉上部の萎縮を認めた。自発運動・言語の減少は亜急性に進行し, 経過半年で自発語がほぼ消失した。

若年性の痴呆を来す疾患の鑑別を行ったが確定診断に至らず, 開頭脳生検を施行し白質優位に非特異的所見を認め, FTDと診断した。FTDとしては若年発症

で進行が速く、白質病変が主体である点が特徴的であり報告した。

7. オリブ橋小脳萎縮症 (OPCA) の胃運動機能低下に対するクエン酸モサプリドの試み：胃電図による検討

石川千恵子, 吉川由利子, 米津彰一
朝比奈正人 (千大)
鈴木淳也 (千葉県循環器病)

症例は経過5年のOPCA53歳女性。2年前より出現した胸のつかえおよび食欲低下に対し、クエン酸モサプリド(選択的セロトニン5-HT₄受容体作動薬)を投与し、効果を胃電図にて評価した。治療により消化器症状は消失し、胃電図上も胃運動機能の改善を認めた。モサプリドはドパミン遮断作用を持たないため、OPCAなどの錐体外路症状を伴う疾患の胃運動機能障害の改善に有用である可能性がある。

8. 糖尿病および臭化ジスチグミンの副作用により顔面に著明な食事性発汗過多を生じた1例

平賀陽之, 大木 剛, 朝比奈正人
新井公人 (千大)

症例は顔面に著明な食事性発汗を認めた糖尿病性ニューロパチーの56歳男性。服用中の臭化ジスチグミンの中止で症状は改善した。本症例の著明な顔面発汗過多は糖尿病による四肢発汗低下による代償性発汗過多、糖尿病性発汗過多に抗コリンエステラーゼ剤による薬剤性発汗過多が重なって起こったと考えられた。糖尿病患者は抗コリンエステラーゼ剤によって発汗過多を起こす可能性があると考えられた。

9. 筋萎縮性側索硬化症 (ALS) における口腔内圧測定の有用性

三澤園子, 朝比奈正人, 内山智之
服部孝道 (千大)

ALSにおける口腔内圧測定の有用性、及び臨床症状との関連性について検討した。

ALS患者6例を対象に、通常の呼吸機能検査と口腔内圧測定を行った。通常の呼吸機能検査では1例が%肺活量(%VC)の低下を示したのみであったが、最大呼気時口腔内圧(MEP)では4例が低下を示した。しかし臨床症状とは有意な関連は得られなかった。

口腔内圧測定は、呼吸筋麻痺を鋭敏に検出できる簡便かつ有用な方法である。また、ALSでは吸気筋に比し呼気筋が早期に障害される可能性がある。

10. MRIで広範な白質病変がみられた間歇型一酸化炭素中毒

根本有子, 古口徳雄, 八木下敏志行
伊藤誠朗, 山内利宏, 大石博通
小林繁雄, 中村 弘, 佐藤 章
渡辺義郎, 中村達夫, 伊東範行
(千葉県救急医療)

48歳男性。排ガス自殺企図後、急性一酸化炭素中毒の診断でOHPを施行し、昏睡状態から回復した。約3週間後から、痴呆と軽微な錐体外路症状が進行し、間歇型と診断し、OHPを再開した。7週間後のMRIでは、淡蒼球病変を伴わない両側の広範な白質病変が出現した。本症のMRI所見では、白質病変が必須であり、淡蒼球病変の有無は予後に関与しない傾向であった。

11. 脳血管造影検査の新たな手技 — 経橈骨動脈アプローチについて —

鈴木淳也, 松田信二, 朝比奈真由美
本間甲一 (千葉県循環器病)

脳血管造影検査に際しては大腿動脈からアプローチする方法が一般的だが、検査終了後長時間の安静を強いられ患者は苦痛を訴えることが多い。経橈骨動脈アプローチは手技に慣れる必要があり、穿刺部対側の椎骨動脈へのカテーテル挿入が困難であることなどの欠点があるが、検査終了後の身体的負担が極めて少なく、高い検査成功率、重篤な合併症も起こりにくく今後広く行われる手技になるものと考えられた。

12. 眼神経帯状疱疹後に対側の小脳性運動失調症をきたした1例

荒木則幸, 高谷美成, 丹羽直樹
(下都賀総合)

眼神経帯状疱疹後(HZO)感染後4週間で、対側の運動失調をきたした1例を経験したので報告した。症例は82歳男性、左眼痛、左前頭部の皮疹出現後4週間で、構音障害、右上下肢運動失調を呈し、MRIにて右上小脳動脈領域の脳梗塞が認められた。HZO後に、遅発性の肉芽腫性血管炎を起こした症例の報告の多くは、同側テント上血管病変であるが、本症例のように、対側テント下血管まで及ぶ可能性がある。

13. 橋出血に見られたocular tremorの経時的変化

小松幹一郎, 高木健治, 下江 豊
(鹿島労災病)

橋出血2例でocular tremor(OT)を約3年間追